

御殿山外国公使館の建設と焼き討ち事件

尊王攘夷派の台頭

嘉永6年（1853）のペリー浦賀来航とそれに続く外交交渉において、幕府は、200年以上続いた「鎖国」を解いた。安政5年（1858）には、大老井伊直弼主導のもと、アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと立て続けに修好通商条約を結び、翌年から長崎、箱館、横浜の3港を開港して貿易が始まった。

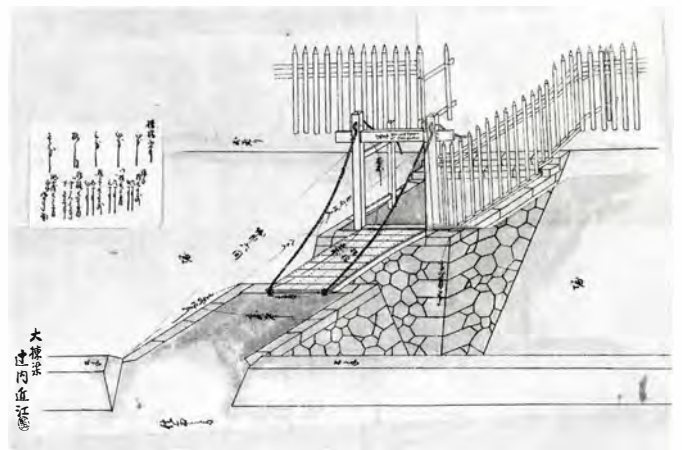
しかし、輸出による品不足や流通構造の変化などから、大都市への物資の流入が激減して物価が急騰し、人びとは開国政策をとった幕府に反感を抱き始めた。井伊直弼主導の幕府の政策に反対する人びとは尊皇攘夷思想をかかげ、万延元年（1860）3月暗殺にいたった（桜田門外の変）。以後、幕府中心の政治体制は大きく揺らぎ、外国人や貿易に携わる日本人商人を襲撃し、政局を左右するまでになった。同年12月のアメリカの通訳官ヒュースケン暗殺事件はその代表例である。

御殿山に外国公使館を建設

文久元年（1861）1月、幕府は公使館用地として深川や品川御殿山を候補にあげ、翌月、最終的に御殿山へ建設することで諸国公使と同意した。御殿山公使館は、これまでの寺院を間借りしたものと異なる完全な洋風建築であり、周囲に深い空堀と背の高い柵をめぐらし、跳橋を設けるなど、攘夷派の襲撃に備えた構造であった。建設は、幕府作事方大棟梁の辻内近江が請け負った。最初に建設されたのは御殿山東南の英国公使館である。

御殿山は、多くの錦絵に描かれたように、江戸中期以降桜の名所として人びとに親しまれた場所であった。そこへ外国の公使館を建てることについて、品川宿は御殿山の由緒と庶民の憩いの場であることを理由に建設反対の意見書を提出した。

そして、攘夷派は襲撃に向けて動き出した。イギリスの外交官アーネスト・サトウは、「この建物を逸早く完成して、早急に引き移ってしまうことが、政策上必要と考えられた」として、襲撃を警戒していたことを著書『日本における一外交官』の中で回想している。



▲跳橋絵図（「品川台五箇国公使館御普請絵図面」所収図。東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵）

長州藩士の英国公使館焼き討ち

襲撃を実行したのは、高杉晋作、久坂玄瑞、井上馨（志道聞多）、伊藤俊輔（博文）ら、吉田松陰の教えを受けた20代前半の長州の若い藩士たちであった。久坂は、文久2年（1862）8月に長州藩主毛利慶親父子に呈した献策書『廻瀾条議』の中で、「御殿山ノ夷館ヲ取り除クベシ」と公使館の焼き討ちを主張している。

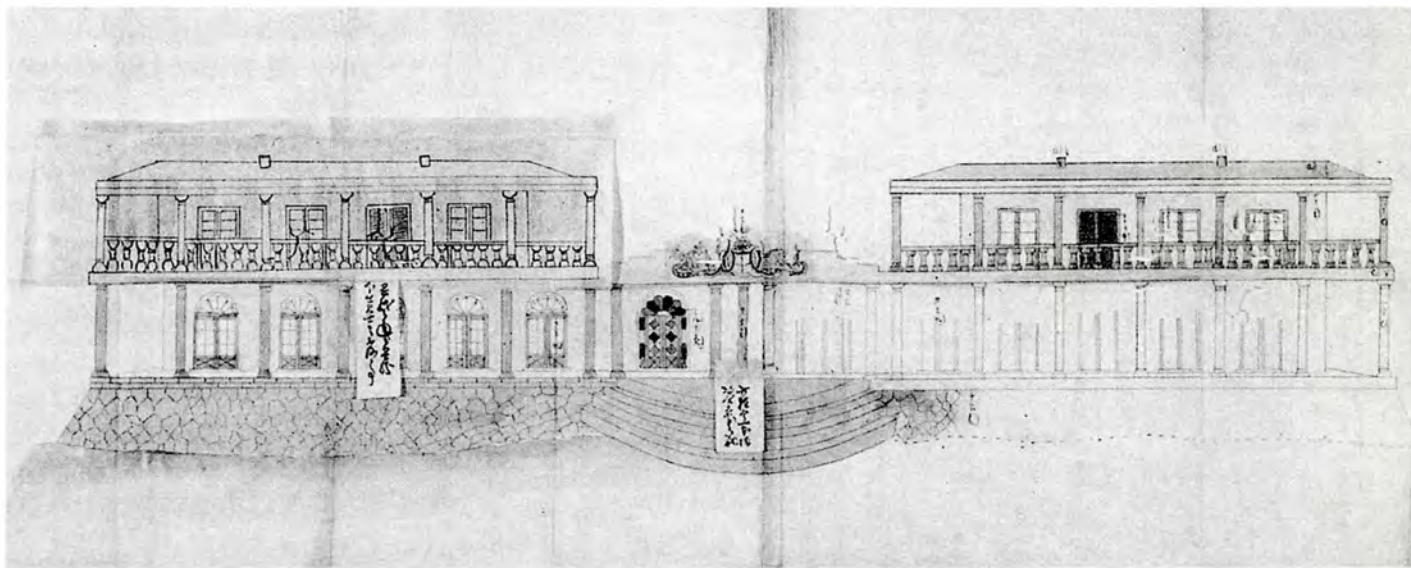
文久2年12月12日の夜九時半（午前1時）、品川宿の食売旅籠屋相模屋（土蔵相模）に集合した高杉や久坂ら13名の長州藩士は、完成間近であった英国公使館に忍び込み、焼き討ちを実行した。明治30年代より世の中に出た井上と伊藤の伝記や回顧録には、焼き討ち事件当日の様子が語られている。それによると、彼らは、空堀と柵を越えて館に侵入し戸板や建具類を積み重ね、爆弾に火をつけて全焼させたという。高杉と久坂は芝浦の妓楼で燃えさかる公使館を眺めながら酒盛りをし、江戸市民の中にもこの事件を歓迎する雰囲気があったと伝えられている。御殿山英国公使館の焼き討ちは、尊皇攘夷運動の高まりを象徴する事件の一つだったのである。



▲昭和初期の土蔵相模（『品川遊廓史考』より）

焼き討ちメンバーのその後

久坂は、焼き討ちから2年後の元治元年（1864）7月の禁門の変で戦死し、高杉は奇兵隊を組織して長州藩の主導権を握り倒幕を目指したが、新しい世を見ずに慶応3年（1867）病死した。伊藤と井上は、幕末維新の激動を生き抜いた。伊藤は最初の内閣総理大臣に、井上は外相・蔵相などを歴任し、「維新の元勳」と呼ばれた。なお、伊藤の墓所は、西大井にある。



▲御殿山英国公使館側面図 文久元年8月（東京大学史料編纂所所蔵）